

■■ 村の動物を語る ■■

対談 小出満二 早川孝太郎 中村 浩

中村 先ず一番身近なものは猫ですね。猫から始めましょう。猫の語源は鼠を好むから鼠好（ネコ）あるいは虎に似ているから如虎（ネコ）あるいは鼠の子を待つから「鼠子待ち」転じてネコあるいはネコマなどといいますが、よく寝るからネコという小野蘭山の説が一番当たっているのではないのでしょうか。漢音のビョウ、ミョウは鳴き声から来たらしいですね。

小出 ネムルコから来たのでしょうかね。

早川 一種の愛称でしょうね。猫は中世以降に外国から来たのは確からしい。

中村 猫は寒がるから熱帯から来たことは確かですね。今日エジプトの東北部に野棲状態でいるヌビア猫がその祖先ともいわれています。

早川 猫にはキジ猫というのがあるが、キジとは一面性根の知れないものを指す言葉です。キジという言葉とゲジという言葉とも関係があるらしい。ヨモギ猫というのはつまりキジ猫のことで、毛並みが特徴です。

中村 白毛で青目の猫はたいていツンボですね。

早川 壱岐にはネコをこたつの代わりにする風がある。

中村 乞食など猫だけはよく飼う。餌がいないから、これもこたつ代わりに飼うといえるでしょう。それはそうとヨモギ猫とはどうしてその名がきたのですか、早川さん。

早川 ヨモギ猫の説明としてヨモギ説が考えられるが疑わしい。海藻であんだふとんをモブトンといいます。これは乾くとゴミが出るので、使う時はろばたできりを吹いて柔らかくして寝る。夜着るきもの、すなわちヨモギですね。昔から猫は家族待遇されていた証拠に猫つなぎ綱というのがある。猫好きの人は虐待だといって怒るが、これは猫の席が定まっていることを示すのです。また猫つぐらという箱があり、だるまの顔をくりぬいたようなのを使う。ネコ（オキゴタツのこと）もあるが猫箱の方が古い。猫背というのは敷物もネコというが背負うのもネゴというから物をおぶった格好をいったかと思う。

中村 ネンネコという言葉もありますね。話は変わるが化猫の伝説は日本だけでしょうか。

小出 支那にもありそうだ。何とかミョウという大事な神もあるが、猫で不思議なのは猫を高い所から投げ落としても地上三寸でちゃんとひっくり返って脚で立つ。

早川 あれは背中に急所があるためです。また猫を捨てに行って河に放りこむと対岸に向かわないでかならずこっちに帰って来る。不思議ですね。

中村 昔から犬は三日飼うと主人の恩を三年も忘れないが猫は三年飼っても三日で恩を忘

れる。だから犬の方が賢いというが、あれはある人にいわせると全然違っているという。つまり犬は馬鹿で単純なので三日飼うと馬鹿の一つ覚えで恩を忘れないが、猫は知能程度が高く三年くらい飼われてもそれほど感謝すべきことと感じないというのです。（笑声）

早川 猫は子供の時は人間の世話になるが、成長すると昆虫やねずみを食っても暮らして行く。つまり独立が出来る。犬は人間に頼らないと生きていけないということもその原因でしょうね。

小出 猫はつけ上がるなあ。ちょっとやさしくするとまだよく慣れないうちから人のひざにのってきたりする。

中村 小出先生の「猫と女はすぐつけ上がる」という格言には私も同感ですね。

小出 非常に阿る性がある。その反面残虐性があるってねずみを取ってもなぶっていてなかなか食べない。二葉亭は猫好きで客に出した菓子を猫が食べても叱れなかったというが。猫好きな人は多いね。

中村 支那でいう狸は、わが国の狸ではなくて山猫をいうのですね。

小出 近頃狸はいるかな。

中村 この頃狸の話は多いですよ。狸が生命の危険を冒してまで人里に出没するという事実は、つまり狸族滅亡の前兆ということもできますね。

早川 北大の八田教授によると日本の狸はロシアからシベリヤにかけているものと同種とか。

中村 この夏妙高山麓へ行きましたが、あの辺も狸の被害がひどいですね。夫婦つれだつて、時には子狸を引きつれて畑に現れ、熟した玉もろこし等を食う。どれが熟しているかわからないかちゃんと知っているんですね、中味を見なくても。狸はまたきれいな水が好きですが飲んだ後はかならず水をにごして行く。狐も同じことをやるが、こういう習性は何のためでしょうね。

早川 筆に使う毛は台湾の狸のです。

中村 狸と「むじな」の違いについて早川さんのご意見は？ このことは例の裁判沙汰で有名だが。

早川 私の郷里では狸と「むじな」は別の動物です。

中村 われわれは狸と「むじな」は結極同じ動物だと考えます。夏毛の淡色なのを「むじな」といい、冬毛の黒く尻尾の先の白いのを「たぬき」という場合もある。また地方によっては「あなぐま」のことを「むじな」といいますね。

早川 ある地方では「むじな」のことを「まみ」といい狸と区別し百姓が両者の区別がつかず村の物識りに訊いたら「足にあかぎれが切れていたら狸（笑声）、切れていないとまみ」といったという話があります。

中村 狐は巧智だという世界の通説で、狐の説話は多いが狐が化かす話は支那と日本だけで、支那では狐に化かされると狐族に入るという話が多いですね。日本では化かされても人間が狐になる話はきかない。

早川 日本でも『今昔物語』にそれに似た話がある。

中村 そうですか。それは珍しい。日本では狐はかならず女に化けるが、ある男が狐が化けたとも知らないで女をめとっていた。ある日、犬にほえられて女が正体を現した。しかし男はその女を愛していたので「来てつね寝よ」つまり「きつね」といったということからこの名がでたといいますね。これは日野巖先生が書いておられますが。

小出 狐族というのもあれば狼筋というのもあって、あの家の人は口が大きいといいちょっと縁談にも障ることが田舎にはよくある。

中村 狐には銀狐、赤狐、黒狐、それに近頃白金狐というようなタイプがある。白金狐、銀狐の毛皮は近頃は目の飛び出るほど高価ですね。近頃は狐も本当に化の皮をはがされてしまいましたね。

早川 背に井げたがあるのもある。

早川 「いたち」は人家にもいますね。

小出 私の家の縁の下にもいる。

中村 通常石崖や河原の石の間によく棲息していて、人家の傍らにもいます。なかなか落ち着いた動物ですね。人に出会うと手をちょっと上げ、つまり小手をかざして形勢を観望する癖がある。

早川 そうですかね。そういえば「いたち」という動物はひどい近視ですね。

中村 そして身が危ないと思うとピッと機敏に逃げる。切羽つまれば「最後屁」を放出する。肛門の背側に一對の毒ガス放出線があるんです。「いたち」の中でもスカンクの「おなら」が一番臭い。米国のある学校でスカンクの実物を生徒に見せた時、スカンクが「おなら」をした。そしてその悪臭のためとうとう学校中休校になったという話があります。また面白いことは北米ではスカンクがよく汽車にひかれる。何故かというと毒ガスがあるので敵を恐れずガスで撃退するくせがあるので汽車にもそれをやってひかれて了う。（笑

声)

小出 そうそうシートンの動物記にスカンクのことを書いてあった。

早川 馬の傍らで「いたち」が「最後屁」をすると馬が三日ぐらい食物をとらないとか。

「いたち」は鶏の巣につくと皆殺して了う。「いたち」がわなにかかるとそのまま水に入るとガスを出さない。雪上の足跡をみると三尺おきくらいに飛んでいますね。一匹捕えるとその巣に今度は別の奴が入り、何べんでもわなで捕えることができるといいます。例外なく雄が巨い。

中村 「もぐら」は一日何度食事するのが本当でしょうか。早川先生はしきりに一日三食を主張されるが。

早川 いや絶対三食ですよ。朝・昼・晩、しかも朝は日の出頃、昼は丁度正午、晩は日没前と決まっている。

中村・小出

それはどうかな。(笑声)

中村 「もぐら」は一度に何百匹も「みみず」を食う。とても貪欲ですね。だから飼育がとても難しい。まごまごしていると餓死させてしまう。

小出 「もぐら」は農作物は食わぬ、害はない、とファーブルはいつているが。

中村 しかし球根は好きでよく食いますね。話は飛びますが石黒忠篤先生の実験によると、「もぐら」を海の沖に出て水中に放り出すと目が見えないのにちゃんと陸に向かって泳ぐそうです。陸の臭いがするのだと石黒先生は言われるのですがね。

早川 北に向いて泳ぐのではないかな。北に向う習性があるとの説もある。「もぐら」が来ると「みみず」が逃げると言うが八ヶ岳の久保さんの話によると「みみず」をとるには土に棒か何かさしこんで動かすと「もぐら」が来たと思って「みみず」があわててぴよこぴよこ首を出すとか。曇った日には「もぐら」が全身を現して「みみず」を食いますね。遠州辺には形の小さい「もぐら」がいる。

中村 日本の「もぐら」は西洋の「もぐら」より歯の数が二枚少なく学名もモゲラといい、「あずまもぐら」と「こうべもぐら」の区別があります。

小出 今は人家に来るのは「いたち」くらいだが、昔は鹿なども来たものだ。

中村 鹿は塩がなくなると人家に来るそうですよ。便所の小便の塩をなめに来る。

早川 わなに小便をしておくといひます。

中村 先年上越の山奥でキャンプをした時、小便をした際にカモシカがたくさん来てこれ

をなめるのを見て驚いたことがあります。

早川 狼も塩をなめるという。

小出 塩を餌にしたそういうものが捕れないかな。

早川 鹿は春先塩に欠乏し、ことに子持ち鹿がひどい。また狼が傷つけた鹿をただ拾ってくると狼が起こるので交換品をおいて来る習わしだが、それには塩がよいという。塩の持ち合わせがない時は、後で持って来るからとittedただけでもよいという。(笑声)

早川 犬の一種にカメというのがある。狼もまたカメとிட்டた。兎とカメの競争は本当は犬と兎の競争ではないかと思える。

中村 それは面白い。早川さんの説がどうも本当らしいですね。

小出 よく山道などで狼に出遇うといい、狼が後になり先になりついて来る話を聞く。

中村 「送り狼」という言葉も出来ていますからね。

早川 頭を飛びこすこともあるそうですよ。その時にナイフを突き上げて持っているると狼が飛ぶ拍子に退治できるといいます。狼はまた尻尾で戸を叩くというが事実かどうかはあやしい。しかし狼はいなくなりましたね。狼の画は割りに少ないようで、鶴岡の近くで捕ったという狼の写生図があり、また豊橋で反古の中から見つけた狼の画は喰いつかれた男があり、格闘して殺したのを写生したのです。写生図としては二枚だけ知っていたが、惜しいことに戦災で焼いてしまった。しかしそれを写真にしたのは今でも残っています。

中村 わが国ではもう狼はいなくなっているのではないのでしょうか。

早川 上野博物館に山犬の剥製があった。今は科学博物館に移譲されているが。

小出 英国では最後の狼であったとちゃんと年号が記録されておる。

早川 山で一番多く聞くのは狼の話だがもうほとんど絶滅しているようです。

小出 今度は鳥に移ろう。小鳥を友として生活することは楽しいな。

中村 鳥と雀はいつも一緒にいる。これは仲が良かったためではなく雀は鳥にいじめられながら鳥の居場所は安全地帯だと知っているからです。

小出 仲の悪い動物でも一緒に飼っていると仲良くなる。猫がカナリヤを口にくわえて保護したという話もある。私は鶏が大好きです。今チャボのつがいがあります。

早川 私も郷里で、みのひき鶏を飼っていたが、ある日異様な鳴き声があるので近づくと鷹に喰われていた。しかも背中を食い破られても生きていて処置に困りましたが、雌はその日姿を見せずにかくれていましたが、敵に向かうのはいつも雄で雌は決してやられない。

中村 鶏は心臓部をやらぬとなかなか死にませんね。以前ある学校で鶏の解剖を教えた時、

クロロホルムでますいをかけて腹をさかせた。十数羽一緒にやったのです。ところが生徒が気味悪がるのでぐずぐずしているうちにますいがさめ、鶏が皆ばたばた逃げ出して大騒ぎしたことがあります。腸を引きずって廊下を逃げ廻る騒ぎです。腹をさいたくらいでは平気ですね。敵に遇うと雄鶏は身をもって雌鶏を守る。先日鶏舎を野犬に襲われたが雄鶏が最初に倒れました。雌をかばって雄々しくも犬に向かうのです。

早川 鶏もそうですが、敵に襲われた時、「きじ」も雄が雌を守り、そのためまず雄がかならず先にやられますね。

中村 土佐で山内一豊公が国公行列に供える鳶鳥という鎗に用いるために尾の長い鶏を農民に要求した。そして「きじ」や山鳥と鶏をかけ合わせて苦心のすえ長尾鶏が作られたんですが、尾を長くするためには一日二、三〇分くらいしか歩かせないで大切に育て、なかなか飼育が大変だそうですね。こういう技術は日本独特で西洋では食うための改良のみで観賞用の改良は少ないですね。魚でも緋鯉や金魚は日本独特だ。

中村 魚といえばあい（あゆ）、こい、たい、かれい、えい等しまいに「い」がつくのが多いのは何か意味があると思いますが、小出先生どうなんですか。

小出 さあ、それは。

中村 鮎は神功皇后が三韓征伐の時この魚で占ったという古事からこの字が出て来たといいますが、魚を占いに用いることは昔からよくあったんですね。

早川 魚はよく占いに使われますね。

中村 欧州の「うなぎ」はデンマークのシュミット博士の多年の研究でその発生がわかっているが、日本のはまだわかっていませんね。産卵場所は比島近くの深海だとも、いやもつと近くだともいいますが。幸田露伴の随筆に「うなぎ」は朝草露の上を這って山を登るといっていますが、実際そうかな。

早川 「うなぎ」は陸を這うといいますが。「うなぎ」と言う苗字の人があるので聞いたら鹿児島県出身で例のうなぎ池近くの部落出身者です。そこでは「うなぎ」を神様扱いにするとか。宮城では「うなんん」、「うなん」という神が多い。アイヌの酋長の墓だろとの説もあったが水の神となっている。盛岡藩では一千町歩開くと神社を設け「うなんん」神を祀った。「うなぎ」のいない地方では山椒魚や「いもり」のことを「うなん」（うなぎ）という。

小出 「うなぎ」は先祖だといっているので「うなぎ」を食わぬ所もある。

早川 「うなぎ」を食わぬ地方は多いですね。

小出 支那、西洋ではあまり食わない。日本でも土佐等では食わない。暖かいところではまずいせいだろう。揚子江から仔を捕ってきて九州で盛んに育てておった。「いわし」で養殖すると甘くなるが、自分では取って食えないでしょう。

早川 「うなぎ」は「いわし」が好き、鮎も喰います。養殖うなぎ（メリケンうなぎ）が逃げ出して繁殖しているとも聞きます。「うなぎ」を食わない習俗は虚空蔵の信仰に関係があるらしいです。

小出 「山の芋化してうなぎになる」とはなにから出たのかな。

中村 「山の芋がうなぎ化するなど、そんなことは出たらめだろうとためしてみたら、これこれ御ろうじろ、まだ尻尾の方はうなぎで泳いでござる」という記録も昔の本にはあるがこれに類したものはたくさんありますね。

早川 山芋を掘り出したらつり針がついていたという話がある。笹が「いわな」になる、口先が「いわな」で三日間生きていたという話もかつて聞いたことでした。ただ形が似ているだけにしては念が入りすぎていますね。山にわらじを捨てるとそれに天狗が小便をかけるとダニになるという話があるが、ある男が山で眠って目がさめると身体中にダニが一面についていた。きっと天狗が小便したわらじの上に座ったのだろう、と。（笑声）

中村 ダニの話がでましたが、ダニはつんぼで盲の追いはぎです。哺乳類の体表から発散する酪酸の臭いがすると、よって来るといいます。ウクソデスというダニは木の枝についていて下を狐や「いたち」のような哺乳類が通ると落ちて来る。そしてうまく当たると血を吸って産卵して死にますが、失敗するとまたやり直す。ダニはこの動作をくり返して時には十八年間もチャンスを待つということをユクスキュルは書いています。わびしき一生ですね。

小出 それで世の一生を暮らすのか。人間が苦勞する必要ないな。（笑声）「くも」も「蟻じごく」も辛抱づよく待っていますね。それからひき蛙が血を吸うというのは本当でしょうか。

早川 兎を捕って来て嚴重に警固しても月の光がさすと逃げて行くというが、これに似た話でひき蛙をおひつに入れておいたらそれから粘液体がぽたぽたたれて下にだんだんたまる。最後の一たれがぽたっと落ちると見るまにひき蛙になって逃げ出したという。また、ひき蛙と木の上の猫がにらみ合っていた。ひき蛙は悠然としているが猫はやがてぽたぽた

と汗を落とし始め、これを下にいるひき蛙がぺろぺろなめる。終には猫は皮だけになって、木から落ちる。それにひき蛙が砂をかけ小便をかけるとその下から臭いきのこが生えて来る、と同時に蠅が沢山集まって来た。それをひき蛙がぱくりぱくり食べる。(笑声) また小杉氏の説によると「なめくじ」が屋根から屋根へ引っ越す時はまず向側の屋根に一滴のねばねばしたものを生じ、次にこっちの「なめくじ」がだんだん小さくなり、向うのねばねばしたかたまりがだんだん大きくなり「なめくじ」はついに向う側の屋根へ渡ってしまう。

中村 その話は傑作ですね。愉快的話だ。

小出 ひき蛙が鳥の血を吸っているのを見た人があるが、この時、鶏とひき蛙の距離は一丈くらい離れていたという。蜜蜂も相当距離があるのに食べる。見ていると吸い込むようだという。

中村 あれは舌の構造がそうになっているからですよ、一丈はちょっと離れすぎているが。われわれと違い、舌が逆に唇の先についている。

早川 赤蛙は美味しいが、「ひき蛙」も美味しい。

中村 「ひき蛙」はうまい。ちょうど鶏肉とそっくりだ。ひき蛙は酒も好きですね。あいつは哲学者か仙人みたいな面がまえをしていて妖気がある。

小出 かめも酒が好きだ。飲むとよっぱらっていびきをかいてねる。

中村 どんな顔をしてねるか見たいもんですね。かめは帰家本能が非常に発達していますね。数里離れた路を峠を越して帰って来たという話もあります。

早川 子供の時、「かめ」のいるはずのないところで浦島太郎の絵にあるままの「みのがめ」を見たことがある。後で行って見たらもういなかった。錯覚かも知れない。そういう錯覚は時々起こると見え、河童を見たという話もある。

小出 河童や狐火を見たと信じている人はたくさんありますね。

中村 「かまいたち」が大嵐の時つむじ風にのってきて屋根にひっかいたような爪跡を残すという話が私の郷里では多いが。

小出 それで屋根の鬼瓦に鎌をくくりつけてこれを防ぐところがある。

中村 雷獣は火の玉が空中から落ちた所から雲上に駆け登るといいますね。いたち、むじなの類だともいう。中谷宇吉郎先生もこのことを書いているが、電気現象で火の玉が地上に落ちた所から逆に火柱が立つことがあり、これは肉眼で見ることが出来ないはずだが、肉眼でこれを見た人もある。これを雷獣で表現したわけですね。

早川 一体日本人は観念的にもものを見るくせが失せ切らない。

中村 アルタミラの洞窟に描かれた野牛の姿がその疾走の脚の形をよく捉えているのは有名ですが、原始人はわれわれの見得ないところまでも見ている。

小出 原始人は非常に鋭敏で野蛮人の方が自然現象をよく見えていますね。開化人には一様にしか見えない煙の立ち方でいろいろな信号をするなど偉いものです。

中村 まだ猿や熊や猪その他の村の動物が残っていますが、今夜は、ではこの辺で。